美女峠に星が流れる

時代小説傑作選

日本文芸家協会 編

美女峠に星が流れる 時代小説傑作選
日本文芸家協会 編
© Nippon Bungeika Kyokai 1999

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1999年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——凸版印刷株式会社
印刷——信毎書籍印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-264662-5

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

美峠に星が流れる

時代小説傑作選

江苏工业学院图书馆
藏书章

館外用

〈編集委員〉

伊藤桂一

尾崎秀樹

磯貝勝太郎

目次

牛斬り加ト　神坂次郎　七
乙前　瀬戸内寂聴　三七
樹影　永井路子　五九
妖瞳　皆川博子　八七
豊饒の門　宮城谷昌光　一二五
水鏡　戸部新十郎　一五五
魔笛　白石一郎　一八五
供先割り　杉本章子　二〇七
月冴――王朝懶夢譚　田辺聖子　二四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

白露記　古川　薫　二六七
高麗屏風　宮本徳蔵　二八九
影刀　黒岩重吾　三〇九
第二の助太刀　中村彰彦　三三九
連理　泡坂妻夫　三七七
雪の菅笠　村上元三　三九三
倒れふすまで萩の原　童門冬二　四一九

解説　磯貝勝太郎　四四八

美女峠に星が流れる

時代小説傑作選

牛斬り加ト

神坂次郎

森ノ石松の愛刀

日本人が刀を携帯し往来していたのは明治の廃刀令までだということになっているが、そんな筈はない。第二次世界大戦の昭和二十年八月の敗戦まで、陸海軍の〝士分階級〟ともいうべき将校や一部下士官たちは白昼堂々と帯刀し、往還を闊歩していた。わずか四十六年前のことである。

そのころ、飛行学校を出て戦隊勤務についていたわたしなども、軍刀を腰に嬉々として外出したおぼえがある。

もっとも、軍刀を吊っているのを忘れて走り出し、鞘を足にからめて転倒したり、軍用トラックから降りるときに、鞘走った刀身が目の前の地べたに抜け落ちるのを見て仰天したりで、あまり颯爽とした記憶はない。

軍刀といえば、館林（群馬県）飛行場にいたころ、同期のHと外出の途中、農家で軍鶏を一羽買ったことがある。いつも立ち寄る町内の理髪店に行って、

「鶏でもシメて昼飯でも喰うか」

という予定であったのだが、あいにく鶏が手に入らず、軍鶏になったわけだ。

ところが、理髪店の女主人も娘たちも、Hの抱えている軍鶏の獰猛な顔つきに怖気をふるって、

「死んでいるのなら料理もできるけど、生きているのなど、とてもとても」

と、薄気味悪そうに言う。

「ああ、それならまかしちょけ」

Hに目くばせすると、わたしは店の裏手にまわった。

ここは住宅と塀に囲まれた五〇メートル四方ほどの空地で、軍鶏の逃げ場はない。

「やるか！」

抱えていた軍鶏を置くとHは、わたしと二人で前後を囲むようにして、たがいに軍刀を抜き放った。

わたしの刀などはありふれたものだが、Hのほうは関西でもちょっと名のひびいた遊侠の

親分の三男坊だけに、持っている刀も派手やかな大坂焼出しの池田鬼神丸国重。
「なにしろ、この鬼神丸ちゅうのは……」
Hが、日頃自慢するのも無理はない。鬼神丸といえば、広沢虎造の浪曲や講談の世界で有名なあの森ノ石松が、都鳥吉兵衛兄弟のだまし討ちにあって斬り結び、閻魔堂で無惨な最期を遂げたとき握っていたのが、これと同じ鬼神丸国重なのだという。
その鬼神丸をかまえてHは、薪でも割るような恰好で両足を踏んばり、腰を落として声をあげた。
「よっしゃ、殺てこませ！」
すると、ゆっくりした足どりで歩きまわっていた軍鶏は、声におどろいたのかHの方に向きを変えた。
その、ひょろ長い首がわたしの目の前にある。
「殺っちゃるぜぇ！」
言うなりわたしは、その背後から長い首を薙ぎ払った。
はずみというのは恐ろしい。
がつん！
と軍鶏の首が吹っ飛び、一瞬、その血まみれの首なし軍鶏が、つよい力で背後から突き飛ばされたような勢いで、だ、だ、だっ、とHめがけて突進して行ったのである。
肝をつぶしたのはHだ。こうなれば森ノ石松もなにもあったものではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「うわっ！」

鬼神丸を投げ出したHは、青くなって遁走した。

――わたし自身の刀の思い出は、女子供でさえ嗤うような腑甲斐ない話柄ばかりだが、これから書こうとするのは、世にも凄絶な、生きた牛の首を一刀両断した大業物《真ノ十五枚甲伏》の秘伝をもって鍛ちあげた大村加ト の稀代の豪刀と、波瀾に満ちたその生涯である。

夜陰の老賊

大村加ト。

寛永六年（一六二九）駿河国有度郡下川原村というから、いまの静岡市内の生まれ。百姓、森助右衛門の次男で名を次郎左衛門。

若いころから武張ったことを好んだ加トは、

「あたら儂ほどの男が、土を耕して世を終わって堪るか」

武士にあこがれ、村を出奔した加トは、サムライへの足がかりの第一歩として、

「まず、医者になるか」

それも並の医者なら頭を丸めて坊主頭にならねばならぬからと、総髪をゆるされた外科医を選んで、諸国放浪のうちに修行をかさねていく。

放浪時代の経緯は不明だが、かれの名が歴史の表面に泛かびあがってくるのは越後国高田

藩二十五万石、松平光長の外科医として召し抱えられた三十歳のころ、本名の森次郎左衛門を捨てて大村加ト と名乗ってからである。

一説によると、大村というのは母方の姓で、その大村の（大）の字に（一）を加えると木になり、（村）の字に（丶）をくっつけると（林）になる。

その（一）に（丶）を加えれば（卜）つまり（加ト）。そして先の二字の木と林を合わせれば百姓の（森）にかえる。――と、どうにもややこしいのだが、この人を喰った、一筋縄でいかぬところが加トの猾介な性癖を物語っている。

『越後分限譜』によれば、高田藩での彼は取高三百石の厚遇を受けているから、外科医として腕がずばぬけていたのであろう。

当時の加トの、卓絶した手術ぶりを伝えたエピソードに、真桑瓜の腑分け（解剖）がある。

「生類憐れみの御沙汰もある当節、犬猫を殺すもはばかられますゆえ、この瓜にて……」

言うと加トは、首席家老の小栗美作や次席家老の荻田主馬、永見大蔵ら歴々の重臣たちが居並ぶ前で、手術台に載せた真桑瓜の肌を撫でながら中身の形状を説明をし、自製の手術用箆刀や曲刀のさばきも見事に、

「さて、ご覧じあれ、いま申しあげましたように瓜の中はかよう簀網で六床に区切られ、左右二十八の筋が伸び、その各部屋に種子が七、八つから十三、四まで納められております」

そう言いながら加トは、その一つひとつを人体さながらに、傷つけることなく絶妙の箆刀づかいをみせて腑分けし、重臣たちの舌を巻かせたという。
その手術の冴えもさることながら、重臣たちをさらに愕かせたのは、
《箆刀の先端の薄きこと透綾（透き通ってみえる絹）にことならず》
という精緻をきわめた数々の手術用具の見事さであった。
「これらはすべて、おぬしの手造りか」
重役のひとりが、感心したように言うと、
「いかにも、わが手になじむ良き手術道具を造るは、医術の一つでもありまするゆえ」
それが、外科医としての加トの信念でもあった。
加トはその、屋敷のなかに設けた鍛冶場へは医術の門人や家族たちの誰にも立ち入らせなかった。
鍛冶場のなかで加トはひとり、鞴を押し、激しい気合を罩めて鎚を打ちつづけた。
こうした加トの、
「箆刀の刃の上にとまろうとした蚊が真二つになって落ちた」
という凄まじい斬れ味は、たちまち城下の外科医たちのあいだで拡がり、風評は風聞をよんで噂の波紋をひろげていった。そうした風説ばなしをさらに掻き立てたのは、人を人とも思わぬ加トの、
《身持ち甚だ不埒にして、夏冬ともに裸体のまま門外へ飛び出し、人目もかまわず放尿》

するという奇矯な行状と、
《鍛冶場に置いていた手術道具の上を、猫がまたいで通ったのを見て、汚れたと言って道具を土中に埋めてしまった》
という潔癖さである。
外科医たちのなかには、垂涎の的ともいう加ト の篦刀を乞うて訪ねて行く者もいたが、狷介で傲岸不遜な加トは、しれしれと嗤って、
「手前が地鉄を打ち精鍛して造った道具は、これみなわが手指も同然にござれば、どの指を捥いで進ぜるということもなりますまい」
と言う。
こうなると、無理にでも欲しくなるのが人情である。そんなある夜更け。厠に立った加トは、鍛冶場のあたりで何か小さな物音を聞いたような気がして、
〈おや？〉
と足を止めた。
そして加トは、月明かりのなかを鍛冶場の方へ忍び寄った。
物音は慥か、この中からである。
みると、注連縄をめぐらし鞴をすえた土間の暗みに、かすかな紙燭（コヨリに油をしみこませた灯具）のゆらぎが見える。
淡く黄ばんだ燭あかりのなかで、白髪まじりの皺ばんだ顔が浮かびあがっている。それに

しても、よほど夜目がきかぬのか、土間に置かれた小鎚や鉄床、鉄鋏などにつまずき、物音を立てながら落ち着きのない目で何かを探しもとめている。

〈まぬけな老賊め〉

不様な泥棒ぶりに加トは、笑いを咏えながら物かげから眺めていると、やがて鍛冶場の正面にある天目一命や金屋神などを祀った棚の上に目を走らせた盗っ人は、

「あ、あった！」

と、顔いっぱいに喜色をみなぎらせて、棚の上に供えられた新鍛の篦刀のほうへ、ゆるゆると手を伸ばした。

加トが一喝を浴びせたのは、この時であった。

「おン汝れ、盗賊め！　そこを動くな！」

思いもかけぬ闇のなかからの呶号に、盗っ人は、生肝をしごきあげられたような悲鳴をあげ、土間の隅に積んでいた赤松炭の俵に足をとられてつんのめり、転びつ転びつ逃げて行った。

天下一の刀

が、世間というのは広いようで狭い。それから十日ばかり経った昼さがり、加トはその夜の老賊と城下の合歓木坂でばったり出逢っている。

「あれぇ？」
いま、右手の刀鍛冶の家から下僕を連れて現われた老隠居は、
「まさしく、あの……」
深夜の闖入者にちがいない。
加卜は、にやりとした。そして素迅く腰の煙草入れに仕込んだ箆刀を取り出し、
「おなつかしや、ご隠居」
と声をかけた。
「このあいだの夜の忘れ物、大村加卜お届けにまいった」
声に、狼狽てたのは隠居である。下僕に用を命じて使いにやると、拝むようなしぐさで加卜の手を取り、
「ま、まずはわが家へ……」
と招き入れ、表戸を閉めると、がばっと音立てるような勢いで土下座をした。そして、
「夜の暗みにまぎれての先夜の醜態、面目もござりませぬ。何卒、なにとぞご容赦を……」
と声をふるわせた。
加卜にしてみれば、この老人を捕まえてどうしようという気はない。ただ、どのような目的で箆刀を盗もうとして侵入したのか、知りたいのはそれだけである。
「その儀なれば、じつは」
この老人、刀鍛冶の米窪悠々斎兼久が箆刀を狙ったのは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton